

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 38



野村町 亥の子

特 地域の顔をつくる 集

『地域資源を活かして』

- 紙にこだわったまちづくり
- ODAの森林を活かした人づくり
- カツオのまち・魚食文化創造をめざし
- 特産品の城川ブランド化戦略
- 日本一の真珠のまち

『地域の顔をつくる』 集

—地域資源を活かして—

紙にこだわったまちづくり……………川之江市／田辺 敏文 ……2
 ODAの森林を活かした人づくり……………小田町／池田 慎一 ……4
 カツオのまち・魚食文化創造をめざし……………城辺町／岡 和三郎 ……6
 特産品の城川ブランド化戦略……………城川町／別宮 静 ……8
 日本一の真珠のまち……………宇和島市／実藤 宏忠 ……10

論談—まちづくり—

生涯学習のまちづくり—その4—……………愛媛大学教育学部教授／讃岐 幸治 ……12

レポート

生きがいを求めて PART 1 …… ～第8回地域づくり交流研修～ ……14

えひめ地域づくり研究会議から

地域づくりのベースを求めて—管見スイスを歩いた2週間／見想録区……………16

ふれあい広場

リレーでちょっとーク（新居浜市・今治市から）……………18

元気印レポート……………20

〈情報誌を通して地域の活性化を —フレッシュ21豊茂—〉

〈まちを素敵に、おしゃれに、そして楽しく —秋桜塾—〉

Information

平成5年度「ふるさと再発見・創造塾」レポート……………24

まちづくり草の根文化講演会……………26

媛のくにフラッシュ……………27

〈別子山村・肱川町〉

ビデオライブラリー新作紹介

特集「地域の顔をつくる」
今号のテーマ

—地域資源を活かして—

今日、県内各地でそれぞれの地域の特性を活かした個性あるまちづくりが、広く住民参加のもと熱心に繰り広げられている。

こうした中、住民のふるさと意識を高め、住民活動の活性化を目指し、地域の個性を強調するために、積極的な「地域のC.I.」が開発されている。地域固有の資源を認識し、それに磨きをかけながら、住民が誇りを持ち、自慢できる特色のあるものを創っていくことは、地域への愛着心を育てることにもつながる。

また、地域資源の個性を強調し、「地域イメージ」を打ち出していくことは、まちの知名度を上げるとともに、ふるさとへのイメージアップの効果も期待できる。

魅力あるまちづくりのためには、自分たちの地域にあるものを、もう一度見直すことから始まるといわれる。

そのようなことから、今回の特集では、産業面にウェイトを置いて、資源を活かし、地域らしさを求めている地域づくりの取り組みをご紹介します。

表紙の言葉

今年には異常気象で、特に米に關しては深刻となりました。五穀豊穡などを願って、「亥の子餅」を元氣良く歌いながら、力一杯地面をたたいて回ります。亥の子石にロープを結んだものが多い中、野村町では、ワラを束ねたもので地面を叩いていました。長野県でもこの方法で、田の神様に感謝する「十日夜」に、「とおかんやおかんや…」と行われています。どこか米に対する奥深い気持ちが伝わります。

柳原あや子



野村町 亥の子

100周年を迎えて

道後温泉旅館協同組合

理事長

新山和臣



温暖な気候、瀬戸内海に浮かぶ美しい島々、人情味豊かな風土、そのような郷土松山市に三千年の歴史を誇る日本最古の温泉郷「道後温泉」がある。その道後温泉のシンボリック的存在である温泉本館が、平成六年四月十日をもって、建設竣工百周年を迎えることになった。

道後温泉は、伝承や古文書によると三千年の歴史を持つといわれており、温泉発見以来今日まで、地域の文化・経済の中心地として、また拠点として歴史を積み重ねている。中でも、飛鳥・奈良時代の聖徳太子の行啓をはじめ、舒明天皇、斉明天皇、天智天皇、天武天皇の行幸があり、時の中央政権との政治、経済、文化の接点として繁栄したと伝えられている。そして、後の源氏物語には、「伊予の湯桁」と記されており、中央において、既にその知名度は高かったものと思われる。

真言宗の開祖、空海の四国巡錫の霊地をたどり巡礼をしたことに始まるといわれる「四国遍路」はその隆盛と定着により、交通や宿泊設備などを著しく発展させた。同時に、地域文化の向上や、宗教的生活の享受と農村社会における重要なレクリエーションの役割も果たしていたといわれている。なお、道後温泉は時宗開祖の一遍上人の生誕地として、深く宗教とかわっている。

江戸時代に入り、初代藩主松平定行により諸設備の整備が図られ、元禄十五年には道後における最古の観光案内書「玉の石」が編み込まれている。

その後、幾度かの整備を経て文明開化の明治を迎え、初代町長に就任した伊佐庭如矢翁により道後温泉の近代化が推し進められ、現在の道後温泉の原形ができたわけである。伊佐庭翁は、百年後の道後温泉を先見し、当時としては大変モダンな城郭式三層楼の画期的な温泉本館を建設したほか、「道後鉄道」を設立し、廃虚化していた県立道後公園を現在のような回遊式公園に改修するとともに、温泉の源泉の拡充を図るため、地域を奔走するなど、道後温泉繁栄の礎を築き上げた。

以来百年、時代とともに発展してきたが、二十一世紀を目前に控えた今日では、人々の生活文化の向上や価値観の多様化等により、大きな変革期を迎えている。また、平成六年度には、四国縦貫自動車道が川内町まで延伸、平成八年度

には、国道317号（玉川線）が開通、さらに、平成十年度には本四連絡橋今治尾道ルートの開通が予定されるなど、高速交通体系の整備が促進されるなかで、来年、「道後温泉本館竣工百周年」を迎える道後地域にとって、新たな展開の契機が到来したわけでもある。

一方、旅行形態の変化と地域間競争に対応していくためには、地域固有の特性を生かし、人々が親しみを持つて何度も訪れていただけのような街にしていかなければならない。さらに、地域住民が生き生きと暮らすことができ、誇りにできるような魅力的な街づくりを進めていく必要に迫られている。

百周年を迎えるに当たり、道後温泉をさまざまな視点から見つめ直し、日本最古の歴史、豊かな伝統・文化を継承しながら、観光と生活環境の調和のとれた温泉情緒豊かでやすらぎのある、全国に誇れる温泉郷づくりを推進するためにも、地域の方々の積極的なご参加とご支援を期待している。

地域の顔をつくる ～地域資源を活かして～ 紙にこだわったまちづくり

川之江市役所 田辺 敏文

「紙のまち」といえば川之江市と、最近ではかなり浸透してきたが、ここまでは多くの方々の方があった。今回せっかく機会をいただいたので、自分なりに整理し、報告させていただきたいと思う。

川之江市の製紙

川之江市の基幹産業である製紙



業は、宝
歴年間
(二七五
一〇一七
六四)か
ら二百数

十年の歴史を持つといわれる。「手すきわざ」は、生業としてこの地方の農民が、独立心と不屈の研究努力によって家内工業から專業へ、さらに個人企業から法人組織へと発展させたものである。

今日、機械すき製紙業三十数社、紙加工業百四十数社、手すき和紙製紙業者二十戸(社)弱が集積し、全国でも有数の紙どころとなっている。工業生産高の約八〇%が紙製品で占められる文字どおりの「紙のまち」である。

四国かわのえ紙まつりの誕生

しかし、高度経済成長期には製紙排水による海・河川の汚染が進み、社会問題としてクローズアップされ、イメージダウンを余儀なくされた。

こうした中、川之江青年会議所が独自に行った市民アンケート調

査で、「新しい郷土のまつり」への関心の高さに着目、地域の発展と人間生活の調和を主題に、小学生を対象とした「第一回ペーパーカーニバル」を企画実施。こうして紙まつりが昭和五十三年に産声を上げた。

こうしてスタートした紙まつりは、第三回からは、名称を「四国かわのえ紙まつり」と改め、その後、年ごとに様々な催しを付加し、盛大なまつりになっていった。

紙まつりの特徴は、年々新たな試みを付加し、常により魅力的なまつりを志向してきたことにある。中でも代表的なものを挙げてみたい。

- (1) 紙おどり
市内約二十団体、千人以上ののぼる踊り連がまち中を乱舞する総踊り。
- (2) ドリームバック
市内で生産されている多種多様の紙製品を一つに詰め合せ格安に販売。
- (3) LOVEかわのえ
紙のまちらしいサイクル運

動として、市内一円から古紙をはじめ廃品回収を実施。

(4) 紙大賞

紙を素材とした新しいアイデア作品を全国的に募集。

(5) まちづくりフォーラム

「紙がなければただのまちか？」をテーマに開催。

(6) 二十四時間映画祭

製紙工場など二十四時間稼働しているまち、映画館のなくなったまちで、思う存分映画を見て楽しもうと実施。

このほか、特に最近では、地球規模での環境問題がクローズアップされている中で、紙のまちの責任を考えるとという視点での「紙と環境フォーラム」の実施や、紙まつり期間中に古紙を回



取し、その古紙で一〇〇%再生紙のトイレットペーパーを実際に製造して、県内外の公共施設等に無償で配付する活動なども行っている。

◎紙まつりから派生したもの

紙まつりの定着は、単にイベントとしての成功を意味するものではなく、市民意識の中に「紙のまち」というイメージを強烈に植えつけたものとして位置付けられる。紙まつりの成長に伴い、「紙のまち」というコンセプトに立ったさまざまな市の施策が市民の要望に沿った形で実行され、スムーズに受け入れられてきた。

その一つが、昭和六十三年に完成した、当市のシンボル施設ともいえるべき「紙のまち資料館」である。観光施設として機能する一方で、定期的な折り紙教室や水引細工教室、絵手紙教室などの開催を通じ、市民の紙文化への意識高揚に大きく寄与している。今年十一月八日には、天皇、皇后両陛下が視察されたのはご承知のとおりである。

紙のまち資料館を視察される天皇、皇后両陛下

また、平成二年には、本県で開催された国民文化祭の協賛事業として「全国ペーパークラフト展」を実施し、多数の方に入場していただいた。

同年には、トイレは紙にかかわる生活文化施設であるとの認識のもとに、「全国トイレシンポジウム」を開催すると同時に、市内主要箇所に紙のまちにふさわしい先進的なトイレを設置する「紙のまちモデルトイレ設置事業」をスタートさせ、現在までに三カ所のモデルトイレを設置した。

さらには、市の中央部を流れる金生川は「紙のまち」の母なる川であるということから、「ふるさとの川モデル河川」として指定されていたとき、景観、アメニティの



栄町モデルトイレ
「オアシス」

観点から重要施策として整備を行っている。

民間サイドでも、青年会議所が、紙のまち資料館を舞台に、JPS（ジャパン・ペーパー・スクール）と名付けた小・中学生を対象とした「紙の学校」を開校させ、青少年に「紙のまち」の誇りを持たせ、郷土愛を育む活動に取り組んでいる。

◎終わりに

「まちづくりは人づくり」とは、すでに言いふるされた言葉であるが、誤解を恐れずに言えば、必ずしも得ていないと思う。そう簡単に「人」をつくれるはずがない。もっと直接的な手段は、「ものづくり」であり、「ことづくり」であり、そして「雰囲気づくり」、

「イメージづくり」だと思う。誇りうる地域とするための土壌こそが重要であり、地域独自のイメージを創り上げていくことで、市民が地域に誇りを持ち、主体的に地域づくりに参加するようになるのではないだろうか。

私は、一市民として「製紙工場の煙突のある風景」に慣れ親しんできたが、子供のころはそれはごく当たり前の風景であり、特別なこととは感じなかった。他の地域とは違うと気付いたのは、ずっと大きくなってからである。

「灯台下暗し」というが、自らのことは分かりにくいものである。川之江市がまちづくりの資源として「紙」をとらえるようになったのは、最近のことであったが、当市の「紙」をテーマとしたまちづくりは、第一段階としては上々の滑り出しだと思ふ。今後は、単なる「紙のまち」から、たとえば「紙と紙文化」というように、「紙プラスアルファ」のまちづくりをどう進めていくかが課題だと考えている。

特集

地域の顔をつくる ～地域資源を活かして～

ODAの森林を活かした人づくり

小田町役場 池田 慎一

◆小田町の

あゆみと特性

本町は、東西十五km、南北九kmの純山間地域にあり、温和な気候と豊かな水辺、肥沃な土壌に恵まれ、太古より開け、貴重な文化財「山の神の火祭り」などの伝統行事が今に伝えられている。



特に乳出の大イチョウ、イチイガエ、ケヤキ、世善桜など、山間地ならではの天然記念物が多く、これらを現在まで代々大切に守り敬ってきた歴史を有している。

このように、古代より連続と続く歴史豊かな緑林文化のまちであり、現代に生きる私たちも、この歴史的伝統を踏まえつつ、二十一世紀に向けて創造的にまちづくりを進めることとしている。

◆緑と水に包まれた

グリーン産業のまち

四国山系の高峰に囲まれた小田深山地域は、全域が国有林であり、標高八百m以上に広がる大森林地帯は、四国カルスト県立自然公園に指定されており、優れた景観美と雪資源に恵まれている。

一方、本町は農林業を中核に発展してきたが、現在においてもその伝統は引き継がれ、桁丸太やログハウス、海布丸太等の生産やバイオテクノロジーの導入によるしいたけ菌床栽培の普及、花き栽培、水耕栽培など、農林業の高次化に向け積極的にチャレンジし

ている。

今後は、より一層農林業の高付加価値化を図り、若年層にも魅力あるグリーン産業の開発に努め、内発的な産業おこし活動による活力あるまちづくりを進める必要がある。

◆資源を活かした

地域づくりの取組み

昨年六月の地域サミットの開催に見られるように、地球環境問題に対する関心が高まり、また、森林の豊かな緑に憩いとやすらぎを求める都市住民の志向も強まっている。そうした中、松山国際理解教育情報センターのアドバイスを得て、世界の中における小田町の在り方を模索しながら、また、この資源を最大限に利用し、国際感覚あふれる人づくりを進めながら、少しでも解決の糸口を探ろうと「ODAの木プロジェクト」を足させた。

◆ODAの木プロジェクトの概要

小田町の「ODA」と政府開発援助の「ODA」、そして小田町最大の資源である「小田の木」を

掛けて作った言葉であり、木をテーマに物事を世界規模で考え、地域から行動するグローバルな視点にたつた教育、文化、地域づくり事業である。このプロジェクトにより、地域社会が直面している諸問題、すなわち過疎化、高齢化、基幹産業の不振などを、在日留学



小田深山溪谷

生、アジア太平洋地域の人々、林業関係者、都市住民など、多様なレベルでの交流やネットワークを形成することによって、解決の糸口を探ろうとするものである。この組織の一つにブランド研究会がある。小田の木をブランド化させ、経済効果を高めるために、キャンペーンやイベントといった

アウトリーチ方式を進めながら、林業リゾートを目指した国際林業フォーラムやセミナー等を開催している。

また、本町の林業振興を図る「小田の木」を選定し、全国に向けて



ログハウス

販売するための各種キャンペーン、イベントなどに参加し、全国にPRするとともに、小田林業のイメージアップを図るため、各種商品（Tシャツ、キャラクターグッズ、世界の木工芸品等）の開発を進めている。これらにより、新し

い林業の活路を見いだすとともに、木材の需要、並びに雇用機会の増大を目指している。

◆これからの展望

この四月にプロジェクトが発足して以来、月四回の会議と勉強会



国際フェスティバル

そして七月のセミナー、ODAの木交流事業、環境教育セミナー、そして山梨県の清里での体験入学生などを実施しているが、早くも七カ月が経過した。林業の町再生と自治体レベルの国際交流を推進する計画であるが、この事業は初

めての分野であり、専門機関、NGO（非政府組織）、先進市町村などのアドバイスを受けながら、より効果的な事業を実施していきたいと考えている。

林業白書にも紹介されているよ



ODAの木交流

うに、地球環境問題や緑と水に対する国内外の関心が高まっており、環境を守る森林の重要性が取り上げられている。この問題は、人類がこの地球上に生存し続けていくために、早急に解決を図っていく

後とも、当プロジェクト事業の役割を再認識し、関係各方面のご支援、ご協力をいただきながら、一層の努力と工夫を重ねて事業の推進に努めていきたい。

これらの事業を実施することに



ODA国際派まちおこしセミナー

より、人が輝き、町が輝き、若者が定住できる活力ある地域づくりにつながるものと確信している。

特 集

地域の顔をつくる ～地域資源を活かして～ カツオのまち・魚食文化創造をめざし

城辺町役場 岡 和三郎



愛媛県の西南端に位置

する城辺町は、宇和海の

温暖な気候や天然の良港と好漁場に恵まれ、昔から漁業が盛んで、水産業が町の基幹産業となつてい
ます。漁業の種類も時代と共に変
わり、まき網漁業からかつお一本
釣漁業、また、真珠養殖漁業から
ハマチやタイの養殖漁業へと移り

カツオの水揚風景（深浦魚市場）



変わっています。その漁業の中
もカツオの水揚基地は、県内では
深浦漁港だけとなっています。

◎深浦のカツオは日本一

城辺町のかつお一本釣漁業の歴史は、江戸時代末期の藩政時代までさかのぼり、昭和三十年代ころは盛漁期になると、四十隻余りのかつお船が毎日のように大漁旗をなびかせ入港していました。現在では地元のかつお船は少なくなりましたが、深浦漁港には高知県の船が入港し、昨年は二千六百トン余りのカツオが水揚げされました。昭和三十二年には、全

国カツオ節品評会で深浦のカツオ節が日本一にもなっています。

また、東京市場では、深浦漁協のカツオは活きが良く、その上脂がのっていることから、日本一の折り紙がつけられており、深浦のカツオが全国の価格を決めるとまでいわれ、他の産地のカツオより高い値段で取り引きされています。

初カツオの水揚げされる季節になると、関東や関西のテレビ局が、日本一のカツオの基地である深浦漁港を取材し、魚市場での水揚げの様子や、おいしいカツオ料理などを全国に向けて放送しています。

◎「海・人・緑ーさわやか城辺」を
キャッチフレーズに

昭和六十一年に「海・人・緑ーさわやか城辺」をキャッチフレーズに、個性豊かなまちづくりを進めていこうと、町内の漁協・農協・商工会・生活改善グループ・鮮魚仲買人組合やお魚小売組合等の団体と行政が一体となって、「城辺町南レク施設利用推進協議会」を設立しました。

初めての事業として、同年十一

月、特産の魚と南

レク城辺公園を結びつけた、

「第一回 城辺ふれあいフェスティバル」を開催したと



の人口より多い一万五千人余りの人々に参加していただきました。

このイベントも、今年で八回目を迎え、今では毎年一万八千人余りの人々が訪れ、ふれあい交流を楽しんでいます。

◎毎年五月に「かつおフェア」

昭和六十二年からは、毎年五月に県内で唯一、深浦漁港に水揚げされる初カツオをメインに、三千本の桜や三万本のツツジが咲く南レク城辺公園を会場に、カツオの即売や試食、一本釣り大会など、カツオに関する催し物を中心とした「城辺かつお&さつきフェア」



松山でのかつおまつり
(カツオの捌き方の実演)

を開催しています。今年は、県内外から初カツオを求めて二万五千人余りの人々が訪れ、現在では県内最大の産業イベントに育っています。

また、このイベントを契機に、毎年五月から七月のカツオ盛漁期に合わせ、カツオの宅配便を行うようになり、数量も年々増えています。

さらに、魚食普及の拡大と町のPR、交流を進めるため、他町村のイベントにも積極的に参加し、鮮魚の即売や試食等普及宣伝に努めています。

魚食文化シンポジウムを まちづくりの出発点に

昭和六十三年二月に魚食文化の創造を大きな柱として、「まちづくり・地域活性化」を進め、魚食文化の情報発信基地として内外にアピールする出発点とするため、県内市町村のまちづくり担当者や漁業関係者を当地に招いて「魚食文化シンポジウムin城辺」を開催し、二十一世紀を展望したまちづくりについて活発な意見交換を行いました。

松山で「城辺かつおまつり」

深浦港に水揚げされるカツオは全国では良く知られているのに、地元松山周辺の人たちの中には、カツオは高知が本場だと思っている人や、カツオはタタキでしか食べられないかと思っている人たちが意外と多いようです。そこで、カツオの「刺し身」が本場においていということを知ってもらおうとともに、カツオの消費拡大と町のイメージアップを図るため、今年六月六日に松山市の日本たばこ産業の駐車場において「城辺かつおまつり」を開催しました。

松山でのかつおまつり・ステージでのカツオの一本釣大会



「おまつり」を開催しました。

開催前日までは、「松山周辺の人はハマチやタイは食べるがカツオはね……」という話を耳にしていたのでとても心配をしていました。ところが、当日は天気にも恵まれ、開門前には三千人余りの人垣ができ、用意した三千食の刺し身の試食や特産品が午前中に品切れとなり、カツオも七千本が売り切れるなど、最終的には一万六千人余りの人が訪れ、大盛況のうちには終わりました。

早朝五時に城辺を出発し、四時

間もバスにゆられ、松山でのかつおまつりにスタッフとして参加した百五十人の皆さんは、帰りのバスの中で、「本場に多くの人が来ってくれたね、次は東京ドームでかつおまつりがしたいね……」と話しながら、また、四時間を掛けて家路につきました。

魚食文化の情報発信基地に

こうしたイベントは、行政主導で開催しており、財源も町が負担している現状であり、このことはこれからの検討課題となっています。今後は、二十一世紀に向け、城辺町独自のまちづくりに取り組んでいくため、これまでの実績を基に、味・新鮮度で日本一のカツオのイメージをより高めていくとともに、年間を通して水揚げされる豊富な魚資源を活かし、まちづくりの核になる魚食文化センターの建設をはじめ、毎月一回、県内外の人々が、新鮮で安いお魚が買える、食べられる、城辺お魚朝市などを開催し、「カツオの町・魚食文化創造の町」としての顔をつくっていききたいと思っています。

特集

地域の顔をつくる ～地域資源を活かして～

特産品の城川ブランド化戦略

城川町役場 別宮 静



◆城川町の概況

当町は、松山市から西南へ約七十五キロメートルに位置し、総面積一・二七・三二平方キロメートルで林野率八二%、農地面積一、〇

二五ヘクタール、人口五千五百十六人の高知県境の山村である。

経済の高度成長とともに過疎化、高齢化が進行し、農業の担い手不足、嫁問題は深刻となっている。

また、義務教育においても児童数の減少は複式学級への懸念、集落においては自治機能の低下等々、多くの課題を抱えている。

当町の基幹産業は農林畜産業であり、その生産額は約三十億円。畜産が六一%を占め、その他の主要産物は、米、野菜、果樹となっている。

このようなことで、町民のほとんどが何らかの形で農業にかかわっており、農業振興が町活性化の最重要課題となっている。

◆光輝く町づくり

二十一世

紀への町づくりを検討していた最中の昭和五十八年、村の隅隅まで



花が美しく咲く

国道沿いの花壇

花が咲き、農地、山林等が美しく管理されたさながら村全体が公園のような西ドイツのあるむらづくりにヒントを得て、新しい町づくりがスタートしたものである。

新しい町づくりを進めるにあたり、「未来に希望を」「豊かな生活の実現」を基本理念とし、「奥伊予城川郷のふるさとづくりアクションプラン」を策定、その実現に努めているところであり、その一つが「わがむらは美しく」運動である。これは、道路沿線や、住環境を花いっぱいにするにとどまらず、公共施設はもちろん、生活の場を美しくするとともに、農地も山林もそれぞれが、あるべき姿に管理された環境を創造し、文化の香り高い町づくりを目指すものである。

◆特産品で町に活力を

「わがむらは美しく」の町づくりの中で、町全体を「安らぎのある豊かな町」にとの考えから、農地の基盤整備を積極的に推進するとともに、奥伊予リゾート開発の拠点となる、宝泉坊温泉、三滝ロッ

この運動も既に十年が経過し、美しい町づくりに贈られる「美しい町づくり賞」(愛媛経済同友会)、「農村アメニティコンクール優秀賞」(国土庁)を受賞するなど、「わがむらは美しく」の運動は着実に成果を上げているところである。

農産物加工センターの
農産物加工品





北歐風の建物

城川自然牧場

自由化によつて経営環境が厳しくなった畜産農家の経営安定と、国際競争力の強化、さらには、畜産の町にふ

製法は、良質の素材にこだわりをもち本場ドイツから技術者を招き、さらに技術者二名を一年間民間企業で技術研修させ独自の製造法でグレードの高い城川ならではの本格的な味を創り出している。

この施設には、現在七名の職員が製造等に従事しており、一日百kg〜百二十kgの部分肉を加工している。

この工場は、これらの製造工程

城川自然牧場の

食肉加工製品



ジ、ギャラリーしろかわ等の施設の整備が進むにつれ、城川町を訪れる観光客は年々増加し、現在では、年間約十三万人に達している。一連の施設の整備に併行して、特産品の開発に着手。農林畜産物の高付加価値化による農業経営の安定と雇用の場の確保を図るべく、その推進を図ってきたところである。

特産品の開発は、比較的容易であるが、販路をどこに求めるかが大きなポイントとなる。

当町では、昭和五十八年以来、農産物加工センター、城川自然牧場（ハム工場）、天蚕センター、無菌培養施設、ふるさと交流館等、

◆城川自然牧場（ハム工場）

当町は、年間五千頭を出荷する養豚の盛んな町でもある。牛肉の

多くの施設を整備し、特産品の開発から製造、販売事業を展開している。今回は、誌面の都合で、城川自然牧場（ハム工場）のみを紹介させていただきます。

城川自然牧場

ハム・ソーセージ製造風景



さわしい特産品づくりを目指すため、平成三年五月に城川自然牧場をオープンさせた。

素材には、冷凍肉や合成着色料、保存料は一切使用せず、あくまでも城川産の地豚を、また、スパイスには、町内産の新鮮な野菜、果物を使った高級手作りハム、ソーセージを中心、二十六種類を製造している。

を自由に見学できるようにしており、試食も楽しめるため、多くの方々に喜ばれている。

これら特産品をどのように販売していくかがポイントであることから、特産品の開発に合わせ、直営店（松山三越、松山空港、八幡浜しろかわ店）をオープンさせた。この三つの直営店を中心に販路拡大を目指しているところである。

今後は、加工機能、販路の拡大をさらに進め、養豚の価格保証のできる仕組みが構築できれば、畜産農家自身付加価値を確認でき、厳しい畜産経営に大いに役立つものと期待している。

特集

地域の顔をつくる ～地域資源を活かして～

日本一の真珠のまち

宇和島市役所 実藤 宏忠

宇和島市は愛媛県西南部に位置し、東は鬼ヶ城山を境として高知県に接し、港頭の九島は、豊後水道の風と波を遮り、天然の良港を形成している。

文禄年間に宇和島城が築かれ、慶長十九年に伊達政宗の長子秀宗



真珠産業の概要

地理的・自然的環境の恵みを受け漁船漁業を中心に水産業が発展してきた。

宇和島市は愛媛県西南部に位置し、東は鬼ヶ城山を境として高知県に接し、港頭の九島は、豊後水道の風と波を遮り、天然の良港を形成している。

昭和二十年代は大手真珠養殖漁業者が中心となっていたが、昭和元年に愛媛県水産試験場において天然稚貝採苗の試験研究により技術開発

が封ぜられて以来、城下町として、また、圏域の中核都市として発展を続けている。

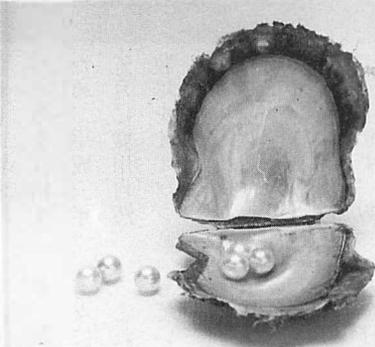
とりわけ西方の宇和島沿岸は、入り江と半島が複雑に交錯した典型的なリアス式海岸や、小島が点在する変化に富んだ漁場であり、黒潮の影響を受けた温暖な太平洋気候が、より多くの海の恵みを育み、真珠やハマチ、タイ等の養殖漁場として、生産量のみならず、品質面でも全国一位の生産地となっている。



真珠の核入れ作業

特に、いわし網漁業を中心とした漁船漁業においては、漁獲不振に伴う倒産などによる不況から、昭和三十一年からは真珠母貝養殖、同三十六年からはハマチ養殖、同三十七年からは真珠養殖へと、地元漁民による養殖漁業への転換によって漁業経営の安定を目指し始めた。

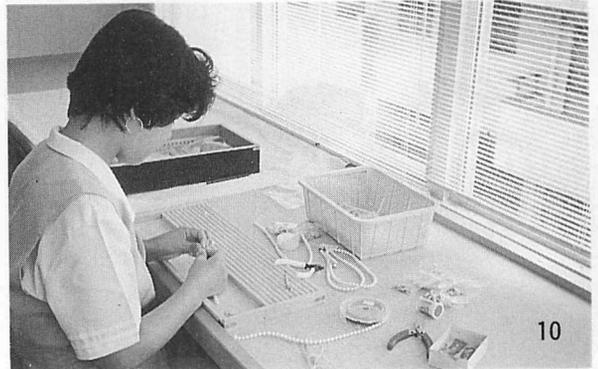
中でも、真珠養殖は、



昭和二十年代は大手真珠養殖漁業者が中心となっていたが、昭和元年に愛媛県水産試験場において天然稚貝採苗の試験研究により技術開発

で育まれた稚貝や母貝は、日本各地に出荷されるとともに、全国で随一の天然のアコヤ貝の稚貝が採苗できる地域となっている。

昭和三十七年ころより、宇和島湾を中心とする宇和島一帯で、地元漁民の間では真珠養殖への転換が始まった。しかしながら当時の転換業者の真珠養殖技術は未熟であった



ネックレスの加工作業

ため、ほとんどが三重県の珠入れ技術者を招いて養殖技術の指導を受ける一方、技術研究会を開催するなどして、技術者の育成に努め、品質の向上に励んだのであった。

このような苦勞を経て、高品質の真珠生産が可能となり、宇和海産浜揚げ真珠の入札会が宇和島市内で開催されるまでになった。

ところが、昭和四十二年ころを境に、長期にわたる不況から真珠生産が危機に瀕したことで、一部の生産者には真珠養殖から他の漁業への転換を余儀なくされた者もいたが、真珠母貝生産量の抑制対策、生産された低品質の真珠を海中に投棄処分するなど、お互いの努力により現在の生産基盤が確立されたのである。

昭和五十三年に、愛媛県の真珠生産量が初めて全国一位となったが、これは、宇和島を中心とした宇和海での生産量である。

その後、養殖漁業が安定するに伴い、海の汚れや過密養殖などによる漁場環境の変化が生じるようになり、アコヤ貝のへい死が増大

するなど生産量が減少し、一時期三重県に生産量の一位の座を明け渡したが、漁場調整やアコヤ貝の養殖管理などの研究を重ね、昭和六十一年には、再び全国の生産量の約三七%を占め、全国一位となった。

その中であって、宇和島市における生産量は、昭和六十年には、全国の生産量の一四%、平成三年には一五%を占めるなど常に安定した生産量を浜揚げしており、宇和海圏域内においても一位となっている。

しかし、いくら生産量が一位であっても、地元での真珠の加工技術の遅れから、真珠を処理して付加価値を付ける技術者の養成が喫緊の課題となっていた。

こうした地域課題を解消するため、昭和六十三年に、宇和島市内に「生産された真珠に付加価値を付け、宇和島真珠を全国にアピールするとともに、真珠養殖業の充実強化と真珠加工業の地場産業としての定着化を図り、生産から販売までの一貫体制を確立する」こ

とを目的に、真珠産業の従事者や後継者が中心となって、愛媛県真珠加工業協同組合を設立した。そして平成五年には、一次加工処理技術の修得者を育成するなど、地元において真珠の加工処理が開始されるようになった。

最近では、真珠を生産するアコヤ貝の体質が弱くなり、死亡する貝が増え、貝の数が低下することをカバーするため、生産者は死亡する貝の数を見込んで養殖をする状況にある。

このように、生産者の管理能力を超えた数を養殖することは、漁場の限界を超え密殖現象が生じ、ますます死亡率が高くなるとともに、品質の低下が見られるようになってきている。

こうした現状を踏まえ、健康で強いアコヤ貝の生産が望まれるようになり、日本各地で人工的に稚貝を生産する施設の整備や技術の確立が図られるようになったが、現在宇和島圏域（下灘漁協、内海村）においても人工的に種苗生産を行い、生産者の要望に応える対

策が講じられている。

宇和島市においても、真珠養殖漁業者の経営を安定させるため、人工採苗生産の業務にも積極的に取り組み、良品質の真珠生産のための研究を行っている。

また、生産された真珠に付加価値を付け、宇和島真珠の安定供給に努めるとともに、関連業者の育成を図ることが強く求められている。

宇和島が名実ともに日本一を維持し、真珠産業を発展させるためには、限られた海での生産力を生産者自らが認識し、「良より質」を求め、高品質の真珠が生産できる体制づくりに努めることが大切であると考えている。

宇和島市としても、地域の活性化を図り、官民一体でイベントを開催し、「真珠のまち宇和島」を強くアピールすることが望まれている。

そのための拠点として「真珠会館」のような施設を建設し、真珠産業の発展並びに観光面での活性化に寄与していきたい。

生涯学習のまちづくり

— その 4 —

愛媛大学教育学部教授

讃岐 幸治

一、じぶんの町がおもしろい

生まれた町、育った町

これからもくらす町

この町にどんな人が
住んでいたのかなー

この町に

どんなことがあったのかー。遠くのことより、

そんな身近なことが

大切に思えてきた。

じぶんの町が おもしろい。

みんなの記憶をたずねて、

あつめて、つないでいく。

そうすると、じぶんの町の

ものがたりができあがる。

世界でたったひとつの物語。

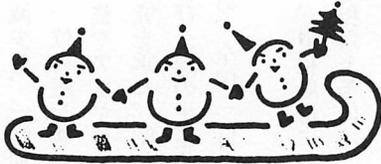
それが「地元学」。

住んでいることが

もっと楽しくなる。

町との

新しいつきあいはじまる。



このキャッチコピーは、昨年宮城県で開催された全国生涯学習フェスティバルに参加した際、ついでに立寄った宮城野区公民館のロビーにあったもの。そこで開かれていた「地元学講座」受講生による報告書の表紙に載っていたコピーである。

ちようど、愛媛という地域を研究対象とした地域学Ⅱ「愛媛学」なるものができないものかと、あれこれ模索していた時でもあり、このコピーは「愛媛学」の性格や方向を考えていく上で、大いに参考になると思入手したものである。

これまで、三回にわたり「生涯学習のまちづくり」について、論じてきたが、編集者からこのコーナーでの私の役目は今回限りとの最後通達を受けた。そこで、「生涯学習のまちづくり」の最終稿として、「まちづくりと生涯学習の接点としての「地域学」なるものの必要

性について、考えてみようと思う。

二、まちづくりと

「地域学習」のすすめ

まちづくりの仕掛け人に会って驚くのは、自分のまちの実情に実に詳しいことである。地理的条件や経済状況はいまでもなく、その地域の動植物にしろ風俗にしろ、動く博物館と言ってもいいぐらい、自分のまちのことを知っている。

当たり前のことかもしれないが、なぜか。まちづくりの戦術はいろいろあるにしても、そのまちの地理的、歴史的、生活文化的特性を基本的に踏まえたものでなければ、本物のまちづくりはできない。わがまちを何とかしようとの思いから、地域を調べ、理解し、発見に努めていくうちに、まちについての知識が豊富になるのであろう。まちを愛することは、まちを理解することであり、まちを理解するためには、まちを知らなければ

ならない。逆にいつてもいい。何よりも自分の住んでいるまちそのものを知り、理解し、愛することから、まちづくりは始まる。

とすれば、それぞれの地域を知る作業こそ大事だということになるが、残念ながら、これまでの教育は、自分の育ってきた地域を取るに足りないものとして、地域を否定する教育であった。「こんなところに生まれてばかりをみた」「こんな所ではうだがあがらない」とか、いつまでもその地域に固執せず、そこから都市に出ていくことを、教育の成果として考える傾向が強かったといっている。

これではまちづくりどころではない。地域を肯定する教育に切り換える必要がある。これが、地域の自然や歴史、風土などに関心をよせ、理解を深め、もう一度見直し、再考していくための運動論としての「地域学」を進めていく動機の一つであった。

まだまだ生涯学習といえば、趣味や習い事をする事、高齢者の余暇活用程度にしか理解されてい

ない面もあるが、まちづくりを担う人を育てていくためには、何よりもまちについての学習活動を展開していくことである。生涯学習の一環として幼児や小・中学生のころから地域についての学習活動を盛んにし、それぞれのまちをじっくりと見つめ直すようにしていくことである。

特にまちづくりとの関連でいえば、例えば、滋賀県長浜市のように市民全員をまちの学芸員にすることだといってもいい。岐阜県高山市のように、観光ガイドができるような市民づくりだといってもいい。住民一人ひとりが自分の住んでいるまちについての学習活動を進めていくことである。

「地方の時代」における生涯学習の典型は、まちづくりと生涯学習を統合した地域学習のすすめにあるといってもいい。

三、地域学Ⅱ「愛媛学」づくり

ところで、地域学習のすすめといっても、まちについての知的情報が集積されていなければ、学び

ようがない。その内容は地理、歴史、郷土料理、しきたりなど多岐にわたるであろう。したがって、地域学習が可能になるためには、住民の誰もがまちの研究者として、いろいろな分野での調査研究を進める体制をつくりだし、それぞれのまちについての研究を集積し、体系化し、例えば今治学、一本松学など、広くは愛媛学をつくりだしていく。

研究の方法は民俗学的なものもあれば、社会調査法もあろうし、タウンウォッチングもあろう。いろいろな方法でもって、個人で、またはチームを組んでまちを探検し、再発見し、そして再考(再構)していく。そのプロセスが地域学づくりであり、まちづくりでもある。そこからその地域の特性が明確に見えてもこようし、それに対する誇りや自信も湧いてこよう。こうした知的土壌をそれぞれのまちにつくりだしていくことである。

まちづくりというのは、それぞれの地域の文化度をあげることであり、地域に知的な風土をつくり

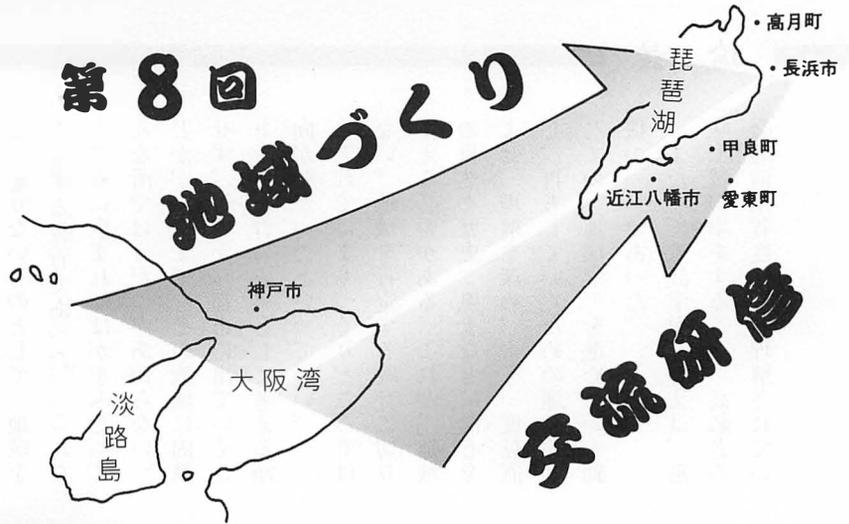
あげることである。もう少し詳しくいえば、まちづくりというのは、住民誰もがまちについて調べ、知り、理解を深め、まちを再発見し、まちに誇りと自信をもって、まちの特性に磨きをかけていく運動だといってもいい。

その意味では、まちづくりは地域学づくりだといってもいい。まちづくりを客観的にとらえた地域の特性を踏まえた活動として、また住民の文化的レベルをあげる方向で継続的に意欲的に進めていくために、地域学づくりが必要になってきたといえる。

仕掛け人ほど、誰よりもまちを知り、学び、愛する故に、あれほど情熱を傾け、日夜まちづくりに取り組んでいるのであろう。まちづくりは、まちを知るといふ作業こそ大事にしなければならない。



第8回 地域づくり



交流研修

生きがいを求めて……

PART II

去る十月二十日(水)～二十三日(土)にかけて、滋賀県・神戸市方面へ、悩める若人十八名が旅立った。「第八回地域づくり交流研修」について所感を交え報告します。

あなたは地域に

何が出来ますか！

近江八幡市浅小井地区

この衝撃的な「まちづくり」の根幹にかかわる問いかけと、浅小井地区の富士谷英正自治会長の熱弁により研修が始まりました。
▽浅小井地区がまちづくりに目覚めた要因：

富士谷氏の話によると、浅小井地区は戸数約百七十戸で、専業農家はほとんどなく、兼業農家が百二十戸程あったが、時代の変化とともに若者の農業離れが進んでいった。

これは、経済優先の社会情勢の



写真右端、富士谷英正さん（浅小井会議所にて）

中で、農業に従事していた人が賃金のより高い所へと就労の場を求めると、人の流れが変わったことによるものと思われる。さらに、若い人たちは、より賃金の高い安定した職場を求めてまちを出ていくという風潮があった。

そして、人々の意識の中に、故郷を出る者はエリートという見方が強く、人間関係も殺伐とし、非常に嘆かわしい状況であった。

一方、親も「こんな時代だから子供が出ていくのは仕方がない」、「自分たちが元氣なうちはしょうがない」という、変な割り切り方をしていた。このままでは、コミュニケーションが崩壊するかもしれない。このことが、まちづくりに目覚めた要因とのことである。

▽新たな動き……

自分のへその尾を切った所に愛着を持ち、何とかして魅力のあるまちにしようと、若者にとって魅力あるまちづくりを目指し、住民自らの手でまちづくりが始まった。富士谷自治会長は、「行政に要望するだけでは、まちはよくなる



写真左から、企画課参事 土田康人さん、同副主幹 吉田正樹さん

ない。自分たちの住む地域のことでは自分たちで考えることで、初めて愛着が湧くだろうし、行動していく中で、自身と誇りが持てる」と言われ、実践者の迫力には圧倒されるばかり。

また、「これからのまちづくりは、自分たちの出来ることは自分たちです。出来ないことを行政に協力してもらおうというスタイルが望ましい」とも言われた。

以上のような経緯から、まちづくりに関心を持っている五人の若者が、浅小井地区の手作りの基本構想（マスタープラン）を作り、それを叩き台として、自治会ぐるみで「まちづくり委員会」と「環境づくり委員会」を作り、二年がかりで検討を重ねた。

そして、行政のアドバイスを受けて、国や県や市の補助事業を上

手く活用し、滋賀県の風景条例に基つき、「瓦は日本瓦にしよう」「外壁は周囲と調和のとれた色彩にしよう」「川の美化に努めよう」などといった『近隣景観形成協定』を締結するとともに、『いけがき等設置補助』を実施し、景観整備に努めている。

この他、豊富な地下水を利用して、『湧水の里づくり』や『はちまん浄苑』など、住民が楽しみながら積極的に取り組んでいる。

また、近江八幡市企画課の吉田正樹さんは、「近隣景観形成については、何の罰則規定も強制力もない。この事業は、心と心の協定を結ぶ過程が大切で、行政が依頼するものではなく、住民同志が共感・共鳴の絆を結ぶことにこの事業の意義がある」と説明された。

さらに、「環境が人をつくり、人が環境をつくる」とも言われていたが、浅小井の人々に会って、その意味を理解することができた。また、これからのまちづくりについて、「地域が本来に望むものを、行政と住民という関係ではな

く、同じ地域に住む住民として、議論することが重要になってくる」と語られた。

浅小井の人々との出会いを通して、そこに住む人が主体的にまちに対してかかわりを持つことで、まちの魅力が生まれるということを確認した。

まちづくりを考える上で、その基盤ともいえるべき住民のことを本当の意味で考えていたか、語り合っていたかと、行政マンとして、住民として、研修生それぞれが振り返っていたようだ。

八幡堀の復活で、全国的にもまちづくりの先進地として知られる近江八幡市も、住民主体のまちづくりとして、ますますまちの魅力を醸し出していくものと思われる。

愛の田園、愛東町

愛東町は、人口五千八百四十三人（平成五年九月一日現在）、戸数千三百戸、総面積四〇・一九平方キロメートルで、農業が主体のまち。

昭和六十年に、「愛の田園づく

り憲章」を策定し、町の木「かし」、町の花「マーガレット」を決定した。

その愛東町では、総務企画課の野村さんにお話を伺った。

「全国的ブームでまちづくりが取り組まれるより早く、昭和五十年代から職員が変われば町も変わるを合言葉に、愛東町のまちづくりは始まり、昭和五十九年からは、第一次オフィス改善運動を展開し、職員のQCグループを中心に職場の活性化に積極的に取り組んできた」と野村さんは言う。

その活動内容の中で、昭和五十九年から六十年には、「日本一マナーのいい職場にしよう」、「一千万円の節減を達成しよう」など、説明をして頂く職員の応対や庁舎を見て、まちづくりに対するプロ意識を肌で感ずるとともに、まるで企業にいるかのような印象を受けた。

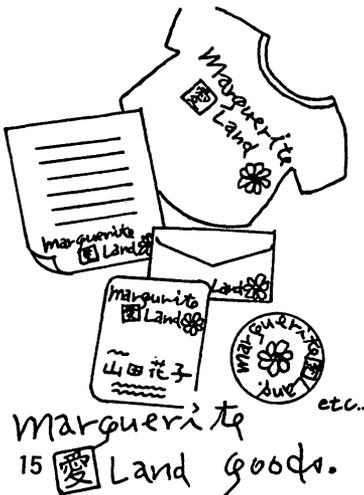
また、女性職員全員によるCIチームも結成され、キャッチフレーズとして考案した「マーガレット愛ランド」をデザイン化し、公用の封筒・公用車（バス）・T

シャツ・トレーナーなどに入れるなど、随所に女性の感性・やさしさが存分に生かされているように思われた。

この他にも「愛のつく町との交流事業」など、その素晴らしい実績もみられ、これら、CIチームを支える職場の側面的な協力体制が、より大きな成果をもたらしたものと感じられた。

最後に、まちづくりを進める中で、知らぬ間に中心的立場に祭り上げられた結果、まちが起きないという例が多い。これからは、住民が自分のこととしてまちづくりにどうかかわっていくか、今のその手法が問われているのではないだろうか。

（研究員 尾崎 弘典）



見聞 スイスを歩いた2週間／見想録(Ⅸ)

【借物革命で個の人間自由へ】 宮本俊一

■呼び声／森の精はフランス語

「ボンジュール…」それはまるで天来の声。明るく透き通った感じながら…柔らかな霞に包まれた優しい響き。思わず口をつく「ハロー…」は顔の赤らむ思い…。

歩いてても歩いてても…黒っぽい大きな樹木の森が続く遊歩道。左の樹間には、ジール川の流れが奏でるベース。いつしか森の気に誘われ、陶然と歩む私の全身に流れたような「森の精」の遠い呼び声…。

もつとも、遠目に小犬を連れて近づくと真白いワンピースの少女を、泰西画を眺める想いで映してはいたが…、今見る彼女は少年の日、映画館の看板で見たディアナ・ダービンの『オーケストラの少女』そのもの…。

「あつ天使が…」と思つたあの再現。もちろん、一瞬に過ぎた現実は程遠く、幼女に近い彼女と年老いた旅人との擦れ違い。でも、私にはスイスで初めて味わう気分。なぜだろう…。

その後、いろいろな想いを浮かべつつ歩く。

「あつ、そうか！フランス語だ…」なんと優しい響き…。それまで聞いた人々の会話は、ドイツ語か英語の世界。出会いの環境と私の心理的状況の違いか…そんな音声の雰囲気とは次元が異なる。…やあつて、「そうだ！あれもフランス語だったか…」と気付く。ずっと気になっていた…列車の検札で、車掌が「シー…」と言つて去る、横着だ。「見た！とは何だ、国営だからか偉そうに…」の思い。それが「メルシー…」だつたお粗末話。以来、スイス史でフランスが絡む事件を見るたび、あの一瞬の幻が脳裏をかすめるスイスの旅…唯一の老いの青春録。

■育ち／スイスカフランス革命

ともあれ、これまで述べたように、スイスとフランスとの絡みは、密接かつ微妙だが、わけても一七八九年

の『フランス革命』は、現代スイスへのエポックを産む前奏だったか…との想いを抱く。

知られる通り、この革命への知的パワーは、ジュネーブ共和国市民を誇るルソーの『社会契約論』だといわれ、極論すればその政治思想はスイス育ちだ。ルソーは『社会契約論』第一編／冒頭イントロの結びで、「幸いにも私は、諸々の政府について考え巡らす度ごとに、自分の研究のうち、私の国の政府を愛する新たな理由を常に見出すのだ…」と、胸を張る。

東洋のルソー／中江兆民の注解では、「ルソーはもとスイスの人であり、彼がわが国と言うのは、スイスを指すのである。スイスは早くから民主政をとつており、この書物の主旨と合致する。だからルソーは、これをそれほど推奨するのである…」と述べている。

もつとも、ルソーの時代のジュネーブ共和国は、スイス誓約同盟の正メンバーではなく、その従属邦であり兆民の誤解だが…、前掲の森田安一氏は、「ルソーはジュネーブ共

和国と同様にスイスの政治体制を理想化していた…」として、『社会契約論』第三編／第四章民主政について(岩波文庫)を引用、「このように主張したルソーの想念には、歴史的にはペルシャ帝国に抵抗した古代ギリシャの都市があり、身近な例として、ハプスブルクに抵抗したスイスの模範があった…」と認めている。

ところが、革命の最終に近い一七九二年八月十日のチュイルリ宮殿襲撃では、ルイ十六世を守るスイス傭兵約八百人が、パリ市民に殺された。「フランス革命は市民階級が貴族階級を倒す形で行われたのに、国王を倒そうとする市民が、先ずスイス人を殺すことになった。国王を持たない民主主義国の民が、民主主義を要求する民に殺される…歴史の皮肉だ…」と、前掲／宮下啓三氏は言う。

そればかりか…後述のように、この革命の混乱が生んだ野心家ナポレオンが、スイス侵略と『ヘルヴェティア共和国』づくりを行うが、彼の結末となるロシア遠征の敗北では、スイス傭兵九千人のうち七百人しか生還できなかった…。

■抗戦／数か月で誓約同盟崩壊

そうした革命もスイス各邦の支配層には無縁か、前号に述べた体制のまま…保守的態度を変えない。下からの変革力も弱い。そこで体制批判派の中には、フランスの介入を期待する者も現れた。一方フランスは、北イタリアを征服し、「チザルピーナ共和国」を樹立したが、その維持の上でパリとミラーノを結ぶ最短ルート確保のため、スイスを通過する必要がある。一七九八年一月、フランス軍は領土の一部割譲要求と、スイス愛国者による介入の要請を口実として侵略開始。

これに対し、ほとんどの邦々は静観の態度だったが、ベルン従属のポオーでは住民が蜂起し、「レマン共和国」の独立宣言をしたり、バーゼルでは農民が市当局に反乱して邦知事邸宅に放火するなど、フランス軍に呼応した民衆の蜂起もあつたようだが、スイス各邦で侵略軍に抵抗したのは、ベルンと内部スイスの諸邦だけ。三月にベルン、五月には他の諸邦が敗れて、誓約同盟は崩壊する。同盟成立から五百余年、その苦

難克服の歩みを見てきた私には、わずか数か月の戦いでなぜなのか、の想いが残る。

■内乱／連邦制で押えた調停条約

ナポレオンは、ベルンを征服するや…、ジュネーブを含むスイス西部の領土をフランスに併合し、四月には、バーゼルの反体制運動家／ペーター・オックス等を利用して革命を起こさせ、『ヘルヴェティア共和国』を樹立し、パリからの統治がしやすいうように、フランスの一七九五年憲法に基づいた憲法を作らせて、その第一条で高らかに『中央集権』をうたわせた。

この政治体制は、旧各邦の自治権を奪い、大きさを平均化したフランス並みの行政区画を州とし、五人の執政が大臣と州知事を命じる、上からの統治方式である。従って、スイスの伝統は全く無視され、フランスが支配する道具のような性格で、フランス軍の略奪や軍税等の重圧と重なり、人びとのフランスに対する幻滅や反感を強めた。特に各州の旧邦支配層は、自ら「連邦主義者」と名

乗り、「集権主義者」と呼ぶ自由主義的改革派に对立。一八〇〇年以降は交互にクーデターを起こし、一八〇二年、占領軍が撤退するや、各地に暴動が続発…無政府状態となる。

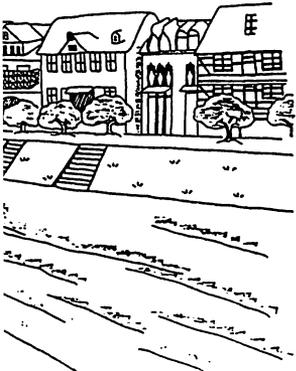
当時、終身執政官となりフランスを掌握したナポレオンは、両派をパリに呼び調停を行い、一八〇三年の「調停条約」が成立。その結果…スイスは連邦制となり、主権が回復した旧十三邦の州に、旧従属邦を同格として加える六州で…十九州の国に再構成された。

もちろん、それは旧誓約同盟に復帰したのではなく、議会とは別に「スイス知事」が置かれ、主要六州の代表が輪番で就任して、主に軍事道路の監視と、軍隊の召集に責任を負うことになる。かくして内乱は収まったが…代償にナポレオンへの兵士供給の義務を負い、フランスの衛星国としてヨーロッパの戦乱に巻き込まれ…、国内を戦場化するなどの被害を伴いながら、ナポレオン体制の崩壊により「復古の波」にさらされることになる。

■共和国／功績は個の人間自由

借物革命とはいえ、『ヘルヴェティア共和国』は、その核となる思想の本質から、時代の要請に應える功績も残している。それは共和国の成立で…二段階選挙の二院制議会が設けられ、民意を代表して新法令の布告を決めたが、そのうちで重要なのは、「封建的桎梏しごくの廃止」に続き、「居住の自由、信仰の自由、営業の自由」など…の個人を単位とする自由権で、スイスの人びとは全く新しい権利だった。また、当然ながら旧同盟による「従属邦の解放」は、共和国成立の最大の功績と言える。

これらは、この後「反動の時代」を乗り越え、現代スイス形成のベースとして守られ、政治ことに憲政と経済、工業化、資本主義発展に重要な人間パワーを産むと想えば、そうした「スイスの知恵」を探る愉しみで…わくわくだ。



お手玉に 世界を見る



新居浜市

武田 健之

もたちは、テレビゲームに興じる毎日。大人も子どもも、機械が相手という、心の無いものとの付き合いが増えている。

このままでは、

心がすさんでしまう。そこで、お

「青春」という名の詩を紹介された本宮和代さんからバトンを受けた。なんとか心の若さで完走し、役目を果たしたい。

私が所属するボランティア・グループの「新居浜アメニティ倶楽部」では、五年前からお手玉遊びの普及に取り組んでいる。

お手玉遊びには、手作りの温かさがあり、笑顔がある。ふぞろいの楽しさ、握ったときのクシャツとした感触がいい。お手玉の作り方や遊び方は、おばあちゃんから孫娘へと引き継がれてきた。裁縫、礼儀作法の教えや、民話なども話して聞かせながら……。

情報化社会の現代。大人は、コンピュータを相手に仕事。子ど

回大会を開催し、前回を上回り、全国十一都府県から選手六百六十人、ギャラリーを含めると四千人が新居浜市に集まった。選手の層も、五歳から八十歳まで、小学生から高校生、OL、主婦、そして男性のチームなど、バラエティに富んでいた。その関心の高さには、

驚くばかりである。

ところで、お手玉遊びは、日本で生まれた伝承遊びだと思っている人が多い。ところが、紀元前千年ころの黒海周辺の遊牧民の遺跡から、お手玉の粗形と思われる石の道具が見つかっている。この遊びが、シルクロードを通じて、世界各国に広がった、とみることができ。今も世界の国々で遊ばれていて、その方法も同じというから不思議だ。

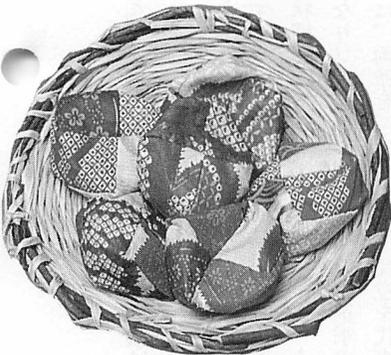
お手玉の粗形を求めて、世界各地を調査しておられる京都大学の藤本浩之輔教授は、お手玉遊びを「世界的無形文化財」と言っておられる。

第二回大会に、アメリカのアト

ランタからメッセージが届いた。ジョージア工科大学の新里留美子教授からであった。「幼いころ、夢中になって遊び戯れた石なぐがお手玉の原形であり、遠くギリシャにまで存することを教えられた時の、身を揺すぶられるような感動は、今でも鮮明に覚えている。石なぐに映された、古今東西を結ぶ縁を思う時、ウイリアム・ブレイクの『一粒の砂の中に世界を見よ。一輪の野の花の中に天国を見よ』という詩を思わずにはいられない」。

お手玉に込められた歴史と、お手玉遊びが持つ多くの利点を、国内に、そして世界に広めたい。新たな出会いと感動を求めて。

今回は、「生の音楽を聴く会」の活動を推進しておられる、土居町の荻田清秀様にお願います。



わが町の ボランティア



最近、少しボランティアの仕事にかかわるようになりました。「ボランティアの特質である自発性、公共性、無償性、この三つめが私に向いていません」などと、サービスのつもりでつまらぬジョークを言ってみても、笑いが返ってきたりこなかったりです。いろいろな人に会ううちに、世の中には立派な人がいるものと感心しています。たくさんボランティアのうち、少しご紹介します。

近藤健太郎さんは、二十年前にサークル「ありんこ」を作りました。当時今治には、よその土地からタオル工場などへ働きに来て

いる、友達のない若い若者が大勢いました。「このまま、若者がばらばらで、淋しい思いをしてはならない」と呼びかけたのがありんこ誕生のきっかけです。レクリエーションから出発し、まだ聞きなれなかったボランティアも取り入れて活動し、そして、二十組ものカッブルも誕生しました。今では、ありんこ二世もたくさん参加しています。創設当時の情熱、壮大なありんこの歴史は、残念ながらこの誌面には書ききれません。

大西町老人クラブの長本さんは、青年のように若々しく、軽やかなステップを踏まれます。老人クラブの方たちは、長本さんをお願いしてダンスを習うことになりました。

た。

長本さんは、「最初、皆さんはしり込みされて、ちょうど牛小屋からいやがる牛を引つ張り出して踊るような感じで、一苦勞しましたが、そのうち面白くなって：。雨の日は休みと決めておきながら、どしゃ降りでも休むのをこらえんどのよ。腰もしゃんとしてきました。わたしはボランティアしているなどとは思いません。わたしも一緒に楽しませてもらっているのです」と謙虚に言われます。

毛利律子さんは、中学校理科の代員をして得たお金を元に、NHKの福祉先進国見学ツアーに参加されました。ボランティアの人たちの交流会では、たくさんの方

れています。「編物やお習字教室へ通って、毎日しつかりカルチャーするのもよかったです、要約筆記、施設訪問等こそわたし自身の勉強になると強く感じています」とおっしゃいました。

ずっと障害児教育に打ち込まれてきた療護園の石川園長さんは、「うちの園生にも生涯教育を受けさせてやりたい」と心底言われています。この言葉には随分重みがあり、今、美術の先生を探しています。

ロッキード事件で有名な特捜検事からボランティアへ、見事な転身を遂げた「再びの生きがい」の著者の堀田力さん。この堀田さんの仕事と生きがいに感動した元高校校長のAさんは、上京の際、「さわやか福祉センター」を訪問し、堀田さんから学ばれました。強力なボランティア予備軍の出現です。その堀田さんの講演を南海放送本町会館まで聞きに行き、感動して帰ってきました。

決まった日に施設でおむつを畳んだり、車いすを押さ



今治市

山本 弘子

次は、広見町にお住まいの元小学校長の水野マサミさんをお願いします。

元気印レポート

情報誌を通して 地域の活性化を

長浜町 フレッシュ21豊茂
二宮 増男

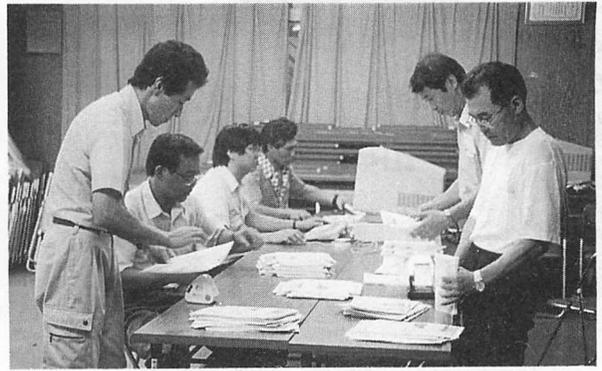


◆フレッシュ21豊茂の誕生◆

長浜町は、県都松山市から西へ約四十km、肱川河口に位置する人口約一万一千人の町。豊茂地区は、肱川の支流大和川沿いに広がる、金山出石寺を含め世帯数約二百三十戸、人口約七百五十人の、若者が減少し過疎化が進む農山村である。平成二年五月、私は造園・都市

計画の建設コンサルタント会社を退社し、豊茂郵便局長として十六年ぶりに長浜町に帰ってきた。それまで公園や緑化など「緑」を通して快適な環境・まちづくりに関わっていたので、局長としても、今までの経験が何か地域のために役立つのではないか、また、今までの行政主導、ハード中心から、住民主体のソフトなまちづくりを目指したいと思っていた。

昨年四月から、ふるさとの良さを再発見しようと地区内の情報誌「月刊とよしげ」、地区出身者への情報誌「季刊ふるさと豊茂」(有料)を発行している。編集作業は、地元に残る後継者と共に行い、B5版六〜八ページとしている。郵便局発行では、誌面内容や予算の問題、また、地域の活性化対策には限度があり、公民館など地域との連携をどうするかを検討していた。しかし、なかなか良い方法が見つからず、それなら新しい会を作ろうと、地元の三十歳代から五十歳代の住民約十人で、「フレッシュ21豊茂」を結成した。



月刊とよしげ編集作業
左から三人目が二宮さん

◆月刊とよしげの発行◆

誌面構成は、今までのワープロからパソコンに変更し、B5版両面印刷十二ページとして、月刊とした。内容は、大きく分けて①今月の話題②行事予定と報告③特集④投稿・意見発表とし、月二、三回編集会議を開き、原稿依頼・収集、入力、編集、印刷、配達をすべて会員で行っている。地区内は全戸無料配布としているが、地区外の人たちからは年間千二百円の購読料を頂くこととし、会員の会費とを合せて経費を賄っている。

今後は、地域活動の一環として公民館からの助成等を期待しながら、活動面でもできるところは一緒に活動していきたいと考えている。

地元は何十年と住んでいても、知らない家、行ったことの無い所もあり、「地域を知る」ということから配達には貴重な体験となっている。

「フレッシュ21豊茂」の一番の役割は、情報誌の発行であるが、これは手段であり、本来の目的は地域のビジョンづくりと地域活動の活性化にある。



発行した月間とよしげ

◆今までの活動◆

(一) 豊茂ビコピコクラブ

これからはますます情報機器に触れ、使うことが多くなる。パソコン・ワープロなどに慣れ、豊かで便利な生活を実現するための手段として使えるようにすることで、機械の使用を通して、逆に人間性や創造性の大切さを見直すとともに、活動を通し地域の和(輪)を広げ、情報の発信と受信のできるネットワークを作ることを目指している。

今年度は、小学校にパソコンが配備されることから、学校や地域との連携を強め、活動を活発にしていきたいと考えている。

昨年度は、小学生が多く、お絵かき中心の活動を原則月二回行い、その作品を情報誌やふるさと祭りで発表した。本年度は、大人の参加者を増やし、作品の発表とともに情報誌の編集を体験していただき、相互に助け合って活動していきたい。

(二) フレッシュ21会館

当初、活動は公民館を中心に

行っていたが、活動の拠点が欲しいということ、地区中心部に近い、以前水車があつた家を借りている。将来は、昔の水車を復元して地区の生活資料館にしたいと話合っている。

(三) 花の里づくり

豊茂には、瀬戸内海国立公園の区域に入る金山出石寺がある。参道には、約五万株のアジサイが参拝者を出迎えている。また、長浜の海岸(夕やけこやけライン)には、町づくり委員会が育てたアジサイロードがある。これを出石寺まで延伸させ、豊茂を「花の里」として整備したいと話合っている。

そこで、八

月にはアジサイを約二千本挿し木した。二十一世紀までに二十一万本にしたのが、考えているが、これから整備

の方針、植える場所や種類、維持管理等様々な問題を解決しながら進めていきたい。

(四) 公園づくり

当地区には、前述の出石寺の他にも歴史的なものが多数ある。特に、県教育委員会調査によると、城跡は五カ所もある。それ以外に、地区中心部には監視防備のための旗見櫓があつた。ここは、地主(故人)の遺志により史跡公園とすべく桜百本、ツツジ類三百株が植えられ、旗おこもり会の皆さんが手入れをしている。この一帯を地区の公園とするため、どのように事業を進めるか、また、維持管理や建設費をどうするかを検討している。「花の里」の拠点として、できるだけ早く実現したい。

また、テレビや新聞で報道され話題となっている、豊茂の「人面の大岩」についても今後の活用方法を検討している。

◆豊茂のビジョンづくり◆

当地区唯一の生活道路である県道長浜―保内線は、主要地方道に格上げされ、整備が急がれている。ただ、道路が良くなれば地域も良くなるという考え方だけでなく、地域のビジョンと関係づけながら、むしろ道路改良を手段と考えることが大切だ。「道路は良くなったが、人もいなくなった」ではすまされない。出石寺、豊茂の自然、あるいはふるさととの原風景としての魅力を追求し、地区の将来ビジョンを模索したい。その一つとして、「花の里づくり」があり、さらに、「休暇を農村で」というヨーロッパでみられる「アグリツーリズム」を視野に入れ、都市と農村の共生、また、自然と環境から、都市では味わえない農山村、つまり「豊茂の魅力」を再認識し、創造することが必要だと考えている。

そのため、一人ひとりが個性を活かし、主体的に自分の、あるいは子どもの将来を夢見た活動ができるよう、常に情報を発信し、受信しながら活動を進めていきたい。



アジサイの挿木

「まちを素敵に、
おしゃれに、
そして楽しく」



「ゆかいなまちづくり事業」という文化イベントを充実させる施策など、ソフト行政を推進し、魅力ある快適都市づくりを目指した取り組みを進めている伊予三島市を訪ねた。

今回の目的は、同市の女性だけのまちづくりグループ「秋桜塾」の皆さんにお会いするため。どんな話が聞けるのか、楽しみにしながら取材に臨んだ。

秋桜塾は、メンバーが皆若い女性で構成され、有名なアーティストのコンサートを継続して開催しているというところで、県内外から注目されている。

ここで、この秋桜塾の活動について紹介したい。

◆「秋桜塾」の誕生

秋桜塾は、昭和六十三年度に県の施策「生活文化若者塾」の一つとして結成されたもので、当時、女性だけの塾は県内唯一であった。これは、「女性による塾を」という市の方針によるとのことであり、これまでの行政やまちづくり

においては、若い世代の女性の意見が反映される機会や仕組みが少なかったため、この組織によって、新しい風を吹き込みたいという狙いがあったとのことである。

開塾式は、伊予三島市のイメージともなっている翠波高原の「コスモス」の園で、華やかに行われ、その名の通り、かれんな花を咲かせたのであった。

◆活動開始

結成当初の秋桜塾の活動は、主に学習会が中心であった。

平成元年度は、学習会を重ねたこと、今後の塾活動について語り合う充電期間とした。そこで出てきたことは、「理論ばかりではつまらない、何かをやるよ」ということで、「皆が燃えるものを」と、相談した結果、コンサートをやってみようということになった。

制も整い、その後の活動に大きな力となっていった。

平成二年

度からは、定例会を持ちながら、コンサートの企画・運営に、熱き情熱を傾けた。その名も「秋桜音楽祭」と名付け、世良公則、宗二郎、山形由美など、それぞれのコンサートを手がけた。

平成三年度には、KAN、水森亜土、平成四年度は、J・W・A・L・K、加藤いづみと、実績を積み上げていった。今年は、十一月にウィーン・オーケストラ公演を開催した。

これらのコンサートは、自分たちが好きで、来てほしいアーティストを選び、直接交渉しながら進めていく。いかに楽しく、おしゃれなコンサートにしていくのが活動のモットーであるという。

経費面については、収支の赤字



秋桜塾・学習会の風景

今回お話を伺った塾生の皆さん
(左から立川さん、井原さん、大山さん)





ある時は、「手伝わせてほしい」と他の地域から女性やってきたことも…。しかし、いつも楽しいことばかりであったわ

「女性グループの悩み」
このように、一見華やかに見える塾も、いろいろな悩みを抱えているようである。一つは、やはり

「飛躍する秋桜塾に…」
そんな活動を通して、一番良かったと思っていることは、「コンサートを終えたときの成就感・

分を市から補填してもらうことになつており、「わたしたちは恵まれている面が多いんです…」という言葉からも、彼女たちが思い切った活動ができる仕組みとなっていることがうかがわれた。
運営については、チケット販売は塾生が手分けしての手売りで、市内で行われるイベント会場や各種グループの会合などへも出向いて、宣伝・販売している。コンサート当日は、裏方として会場の整理・受付に忙しく駆け回る。そのことで、アーティスト側のスタッフと仲良くなることができるという声もある。

「加藤いづみコンサート」の時。会場の飾り付けなどアットホームな雰囲気でも、観客を迎える塾生たちのコスチュームまで気を配っていたが、肝心の観客の入りが悪い上、加藤いづみさんも風邪で声が出せず、歌ってもらえなかったということがあった。このときばかりは、塾生たちもがつかりしてしまい、用意していた手づくりのサンドイッチやフィズを、泣きながらやけ飲み、やけ食いしてしまったという。「でも、今では一番思い出のあるコンサートです」と、笑って語ってくれた。

かわっている人は少ない。塾生同士のつながりという点は、今後考えていかなければならない課題の一つではないだろうか。
しかし、塾そのものの活動は、その時ごとに塾生の総意をもって進めているので、停滞してしまうことはないようである。
やりたい人がやりたいことを続けていくことが、この塾の特徴のようである。

自分が住むまちへの愛情と、この素直な思い入れが、次第に周りを取り込み、動かしていくのかもしれない。
また、このように市民グループの思い切った文化活動を積極的に支援する市行政の在り方について、同市のまちづくりへの意欲の一端を見る思いがした。

(取材／研究員 石家 清)

コンサート会場入口
で観客を迎える



若い女性ということ
で、結婚を機に退塾
してしまうこと。結
婚後は、制約があり
塾活動が続けるのは
難しくなるという。
また、転勤などで塾
を離れなければなら
ないこともある。こ
のようなことで、塾
生の入替わりが多
く、当初から塾にか
かっている人は少ない。塾生同
士のつながりという点は、今後考
えていかなければならない課題の
一つではないだろうか。
しかし、塾そのものの活動は、
その時ごとに塾生の総意をもつて
進めているので、停滞してしまう
ことはないようである。
やりたい人がやりたいことを続
けていくことが、この塾の特徴の
ようである。



明日のふるさとづくりを担う

人材の育成をめざして

平成5年度「ふるさと再発見・創造塾」レポート

愛媛県ふるさと整備課

宮本 泉

*はじめに

ふるさとづくりを推進していくためには、私たち自らが時代の流れや地域の実情に即した確かな視点と幅広い視野を培っていく必要があります。

このため、県においては、明日のふるさとづくりを担うキーマンの育成を目指して、今年度から新たに「ふるさと再発見・創造塾」を開設しました。

この塾では、県内の市町村から推薦された二十五名の塾生を対象に、県内外の講師を招いてのふるさとづくりの基礎と実践を学ぶ県内研修、ふるさとづくり先進地との交流を図る県外研修、地域住民の皆様にも参加をいただいで公開講座「ふるさと再発見・創造フォーラム'93」など、さまざまな

研修を実施してきました。

まちづくり総合センターと県内七十市町村に共催をいただいで実施したこの塾の概要を、私なりの感想を交えながらご紹介します。

*県内研修

七月十六日から始まった県内研修では、前半二回をふるさとづくり基礎講座、後半三回をふるさとづくり実践講座として、県内外の学識経験者やふるさとづくり実践活動家を招いて講義を行ったほか、塾生自らがふるさとづくりの課題について考えるグループ討議などに取り組みしました。

一日二回、四時間にわたる講義は多少ハードでしたが、基礎講座では、ふるさとづくりの現状や課題、時代の動きなどについて広い視野での講義が行われ、実践講座

では、県内外の第一線で活躍する実践活動家からふるさとづくりの戦略やノウハウなどについての事例紹介や示唆に富んだ提言が行われました。

「若者にとって魅力あるまちとは」をテーマとしたグループ討議では、総合アドバイザーである讃岐幸治先生（愛媛大学教育学部教授）の指導により、自らの活動や体験をもとに活発な意見交換が行われ、塾生の相互交流にも大いに役立ちました。

*県外研修

県内研修のふるさとづくり基礎講座を終えた後、八月二日から五

日にかけて、熊本県において県外研修を行いました。

塾生の仕事の関係などから、十二名の参加となりましたが、この研修を契機に塾生の皆さんが打ち解け、塾生相互のネットワークが育まれたようでした。

九州南部の大雨のため、予定の列車が発車しないというハプニングにも見舞われましたが、無事熊本県に到着。

初日は、熊本県庁で県内のふるさとづくりの現状や県の支援施策などについて説明を受けた後、熊本市近郊のグループと交流。二日目は、中央町の日本一長い石段を



県内研修第1回講座
(講師：愛媛大学法文学部教授 横山先生)



熊本県での県外研修
(小国ドームを視察)



視察後、平家の里づくりに取り組み、泉村に入り、地元「いずみシンポ塾」と交流。三日目は、木の復権をめざす小国町の木魂館でレクチャーを受けた後、地元グループと交流。最終日は、小国町内の施設見学を行った後、一路ふるさと愛媛をめざしました。

小国町の有名な木造施設「小国ドーム」や「ゆうステーション」、泉村の「平家の里」などを目の当たりにしたことも感激でしたが、それよりも、こうしたふるさとづくりを支えてきた人たちが地域で頑張る若者たちに出会え、両県の

ふるさと再発見・創造フォーラム'93
平成5年度「ふるさと再発見・創造塾」修了式



交流の輪が広がったことが最も大きな財産となりました。

***ふるさと再発見・**

創造フォーラム'93

ふるさとづくりには、リーダーの育成と併せて、地域に人材を育てる土壌や環境を育んでいくことが大切です。

こうしたことから、地域住民の皆様にも参加をいただいて、塾の公開講座として「ふるさと再発見・創造フォーラム'93」を、十一月十二日女性総合センターで開催しました。

「ふるさとづくりの今日的課題をさぐる」をテーマとしたこの

フォーラムには、定員いっぱい三百人の皆様に参加をいただきました。

まず、知事代理の阿部企画調整部長から、開会あいさつと塾生への修了証書の授与が行われた後、長野県小布施町で住民自らの手による町並み修景事業に取り組みする村次夫先生から、「現代に息づくまちー町並み修景から地域文化創造へ」をテーマにふるさとづくり実践講座が行われました。

続いて、塾生三名によるふるさとづくり活動報告を切口に、実践講座の講師である市村先生、岩手県岩泉町でドライフラワーづくりを核にふるさとづくりに取り組む坂本ゆり先生、塾の総合アドバイザーである愛媛大学の讃岐幸治先生の三名による鼎談に入り、人づくり、環境づくり、モノづくりについて活発な討論が行われ、「ふるさとづくりの今日的課題」について考える意義深いフォーラムとなりました。

***事業の展望**

十一月十二日のフォーラムを

もって、ふるさと再発見・創造塾の研修課程のすべてが修了し、二十五名の第一期生が誕生しました。手前みそながら、この塾の成果を考えてみますと、一つには、県内研修や県外研修を通じて、自らの地域のふるさとづくりの現状が客観的に把握でき、これからの取り組みについて何らかの方向が見いだせたこと。二つには、塾生相互の交流により、愛媛のふるさとづくりネットワークが広がってきただことが挙げられるのではないかと思います。

特に、ネットワークについては、第一期生OB会が結成されるなど、今後の交流が愛媛のふるさとづくりに新たな活力と刺激を与えてくれるものと、大きな期待を寄せています。

初めての事業ということもあり、塾生の皆さんにもいろいろと迷惑をかけたと思いますが、第一期生の皆さんから寄せられた意見を反映させ、今後とも塾生の皆さんが主体的に参加、活用できる塾づくりに努めていきたいと考えています。

夢

創造

未来



魅力あるふるさとづくりを求めて まちづくり草の根文化講演会

当センターでは、地域固有の歴史や生活文化に裏打ちされたまちづくり活動の原点を探り、個性的で独創的な活力と潤いのあるふるさとづくりを進めていくため、関係地元市町村との共催で、まちづくり先進地の実践者を講師に招き、『まちづくり草の根文化講演会』を開催しています。

十月四日（月）、今年二回目の講演会には、地元宇和島市をはじめ近隣町村からの参加者に加え、

松山市しあわせづくり推進協議会の方々など約百五十名の参加を頂きました。

『地域の特性を活かしたまちづくり』と題したテーマのもと、講師の在研究所の佐藤優所長から、盛岡市のまちづくりの先進事例を挙げながら、ご講演を頂きました。城山周辺を都市景観形成誘導地区に指定し、地区内の新改築建築物の高さ制限を定めるなど、「歴史と文化の町」を目指した取り組みが行われている宇和島市をはじめ関係者にとって、大変参考となる講演会となりました。

■講演会要旨

盛岡市では、昭和四十六年の自然環境保全条例の制定や行政と市民が一体となった「環境デザイン委員会」の発足などを経て、昭和五十一年度より三年をかけ、十八件の歴史的建造物を指定し、その保存に努めるとともに、都市景観建築賞を設けるなど、都市景観の形成に取り組んでいる。

このように、都市景観や風景を

考えるのは、単に感じが良いからというのではなく、次の世代の市民である子供たちの健全な成長のために大切であると考えるからである。

この景観というものを考える場合、市民が主体となった活動が大事である。行政の予算措置・情報提供などが手厚く、市民の活動が活発であるというように、両者のバランスが程よく取れていると、まちは極めて良くなっていく。

また、まちのデザインを考えるとき、空間的なものだけではなく、時間的なデザインというものも考えなくてはならない。そして、決してイベント・ファッショ的な町並みはつくるべきではない。一時的には賑やかで面白いけれども、時間的なデザインという観点からいえば、恐らく年の経過とともに駄目になるからである。

そして、たとえ民間の建物であっても、五十年・百年と経って多くの人が繰り返し見たものは、山や川と同じように公共性を持つてくる。理解を得て保存に努める

ことが大事と考える。

まちづくりというのは、簡単にいえば個性の演出である。東京のまちづくりが理想的なものであると考えると、みんながそれを真似しようとした時代があったが、今はそんなことを考える人はいない。それぞれに、地域の特性やそれに合った生活というものがある。決して人の真似をしない、自分たち独自の物差しを持ってまちをつくらなければならない。研究員 松岡 正範





当村は、四国
山地・赤石山系
の南側に位置し、
村の中心を吉野

この福祉センターは、住民全員
が利用できるよう村の中央に建設
しており、センター内には、風呂・
カラオケ・ヘルス器具等を完備し
ておりますので、くつろぎながら
ふれあいの輪を広げていただけれ
ばと考えております。

また、村内の七十歳以上の高齢
者を対象に、毎月一回給食サービ
スも行っております。

福祉センター オープン

別子山村

川のキ
ヤッチフ
レーズで
ある「潤
いと安ら
ぎのある
ふるさと
づくり」
を目指し、
かねてよ

川水系銅山川が流れており、溪谷
と高山植物等が目を楽しませてく
れます。「四国の軽井沢」といわ
れるほど夏でも涼しく、避暑に訪
れる方も多く、山里の自然を満喫
されております。

当センターは、毎月第二・四土
曜日を一般開放の日としており、
ご利用いただく方は特に限定して
おりません。ほかにも前もってご
予約いただければ利用することが
できます。

避暑等で訪れた際など、どうぞ
気軽にお立ち寄りください。

※問合せ先 別子山村役場

☎(0897)6412011



いろいろな風
車等の模型、
絵画、書など
を展示します。

また、屋上には太陽光発電機を
設置しているほか、屋外にも各国
のいろんな風車や風を体験する風
洞実験室を設置しています。

このように、「風」にこだわっ
た学習、文化、レジャー空間の創
出を目指した施設としており、訪
れる人には満足していただけるも
のと確信しています。

※問合せ先

☎(0893)3412311

風のまちに 風の博物館 完成

肱川町



地域づくりビデオ（貸出し）のご案内

（財）愛媛県まちづくり総合センターでは、「地域づくりビデオ」を用意し、無料で貸出しをしています。今回下表のビデオが新しくそろいました。既存のビデオと併せ、各種内容のものがそろっておりますので、ぜひご利用ください。（貸出し期間は原則として2週間までです）

No	タイトル	製作者	時間(分)
90	ふるさと再発見-21世紀のふるさと創造 快適で個性あふれる地域づくり	愛媛県	30
91	『新宮 四季を綴る』 水と緑、自然の中で育まれた人々の心	新宮村	25
92	新宮村 産業&アウトドアレポート	新宮村	25
93	21世紀の宇摩が見えますか？ U M A フォーラム21	アトリエ U.M.A.	100
94	ふるさと再発見-21世紀のふるさと創造 均衡のとれたたくましい県土づくり	愛媛県	30
95	四国えひめ 西瀬戸ロマンの旅	愛媛県	15
96	〃 (英語版)	愛媛県	15
97	ふるさと再発見-21世紀のふるさと創造 力強いさきとした産業づくり	愛媛県	30
98	533人の梅干し物語 ～梅干しの主張全国コンクール～	大分県 大山町	30
99	ふるさと再発見-21世紀のふるさと創造 幸せで明るい長寿・福祉社会づくり	愛媛県	30
100	ふるさと再発見-21世紀のふるさと創造 均衡のとれたたくましい県土づくり	愛媛県	30
101	せせらぎ遊園のまち甲良／甲良三代偉人／甲良の祭り	滋賀県 甲良町	60



何気なく毎日を過ごしても年をとりませう。

一生懸命過ごしてもやはり年はとります。

同じ年をとるのなら日々一生懸命過ごして年をとった方が、人間少しは味が出る気がして…。いつもそう年頭に思う私ですが、今年もやっぱり、去年と同じ一年が過ぎようとしています…。

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係

二人の M s . (中 路 ・ 川 原) ま だ
〒 7 9 0 松 山 市 三 番 町 八 丁 目

二三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL 0899(32)7750

FAX 0899(32)7760

発行/平成五年十二月十五日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

えひめ地域づくり研究会議